

《岐阜県教育委員会賞》

幸せを作る言葉の力

山県市立高富中学校 3年

夏目 梨央

「あなたは言葉を大切に使っていますか。」そう聞かれてすぐに「はい。」と答えられる人は、どれくらいいるだろうか。古くから日本では、言葉には不思議な力が宿り、口に出した言葉は「言霊」となって現実に大きな影響を与えると信じられてきた。しかし現代、日本では言葉の持つ力に目を向けず、無意識に使うことで誰かを傷つけている光景をよく目にするように思う。SNSでの誹謗中傷により不登校になったり、命を落とす人が後を絶たないことが社会問題となったりしているが、動画サイトへの心無いコメントなどでも、傷つけてやるという明らかな意思を持ったものとは別に、その場のノリで面白いと思って、言葉の力を深く考えず発信しているものも多いように感じる。残念ながら、そのような言葉を軽んじる風潮は、ネット社会だけでなく学校生活の中にも存在している。

中学生になって私たちは、今までとは異なる、ノリやリズム、雰囲気重視した会話をするのが多くなった。そのような会話は高揚感がありとても楽しいものだが、その会話の中では良くも悪くも強い言葉が好まれ、言葉の持つ力の危険性は軽んじられる。大抵の場合は、マイナスの言葉を受けても、築き上げてきた信頼関係や発した本人の表情、態度などを基に、頭の中の翻訳機を使ってプラスの言葉に変換して聞いている。しかし何度も重なれば、言葉は私たちの心を深く傷つける刃となり、最後には揺るぎないと思っていた絆をも断ち切ってしまうのだ。そんな危険物としての姿を持つ反面、言葉の大きな力はプラスにも働く。

私は幼い頃から読書が大好きだった。小学生になると毎朝、偉人の言葉が載った本を開き、その日に出逢った言葉をお守りのように胸に抱えて登校していた。言葉はいつもより私を強くしてくれ、迷った時には行く道を照らす道標となってくれた。高学年からは歌を聴くことも趣味に加わり、好きな曲の歌詞の中でも、素敵な言葉に出会えるようになった。辛くて悲しくて消えてしまいたくなった時には、本や歌詞の作者が紡いだ言葉たちが、悲しみの雨から私を守ってくれる傘となった。

言葉は使い方次第でさまざまに形を変える。そして言葉の力は、誰もが平等に使うことができる魔法のようなものだ。

私は今テニス部に所属しているが、そこでも意識的に言葉の魔法を使うようにしている。ダブルスの試合中、いつもの調子が出ずに失敗が続いて心が折れそうになった時、弱い心を打ち消すように、強く祈りながら魂を込めて「大丈夫、次入るよ！」と声を張り上げている。その言葉はペアの心に届くようにと発したものだが、言葉を発した私自身にも、大きな希望と勇気を与えてくれる。以前、実力差が大きくとても敵わないと思っていた相手との試合で、思いがけず勝利を収められたことがあった。その時はいつもよりペアとのコミュニケーションが多く、思いのこもった本気の言葉をお互いにかけて合うことで心が通じ、普段以上の力を発揮できていたように思う。つまり、言葉の魔法が強く働いていたのだ。

心から何かを、誰かを思って言葉を発する時、魂は一つ一つ言葉の形をとり、伝えたい相手の心に直接触れる。そんな心の核にまで届く言葉こそ、「言霊」なのかもしれない。

「言霊」は万葉集の中にも、「大和の国は言霊の幸う国」として登場する。これは、日本は「言霊」が幸せをもたらす国だ、という意味だ。そして「幸う」とは「幸い」のことであり、その語源は「咲き這う」、つまり「心に咲いた花が這うように広がって長く続くこと」を意味している。相手を思う温かい心で発せられた言葉は幸せを生み出す。私はそんな言葉「言霊」の力を信じている。「言霊」が幸せをもたらす世界。私はまず一番身近な社会である学校で、真心のこもった温かい言葉をかけ合い、互いの心に平和を築きながら、笑顔の花が咲き誇る幸せな環境をみんなで作っていきたいと思う。

言葉は私たちの思いを乗せて未来へと向かう。紡いだ言葉は自分自身を作り、いつしか運命へと繋がる。私たちは言葉の力で幸せな世界を作り出せる、そう信じている。